



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

18世紀イギリスの雑誌出版と階級形成：テキスト 定量分析の試み

著者	和田 将幸
雑誌名	経済学論究
巻	73
号	2
ページ	181-204
発行年	2019-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028380

18世紀イギリスの雑誌出版と階級形成

— テキスト定量分析の試み —

The Making of Middle Class and Print Culture: The Text Analysis of 18th-Century Magazine

和田 将 幸

In the study of modern England, there are many research histories in the discussion about the formation of middle class. There is no doubt that the middle-class played an important role in the establishment of capitalism.

This paper investigates middle-class identity formation through text analysis of 18th-century magazines.

Masayuki Wada

JEL : N00, N83, N93, C00

キーワード : ミドルクラス, 中産階級, 出版文化, メディア, テキスト分析, テキストマイニング

Keywords : middle class, print culture, media history, text analysis, text mining

1. はじめに

近代イギリスを取り上げた研究において、ミドルクラスの形成についての議論には多くの研究史がある。いわゆる「ミドルクラス」と呼ばれた存在が、資本主義が成立に対し大きな意義を持ったことは論を待たない。

かつてマルクス主義史観の立場から「中産階級」と呼ばれたその存在は、本質的には経済的関係によって規定されており、産業革命の結果として登場したものと考えられてきた。だが、例えば 18 世紀末から 19 世紀の労働者階級の形成過程を対象としたエドワード・トムソンの業績が、労働者がその経験を通

じてある種の共通の意識を持ち階級を形成したことを明らかにしてきたように¹⁾、「階級」は経済的關係によって規定されるというよりは、日々の経験の中で自らをどのような存在として認識したかという自意識、他者からどのような存在として見られているのかといった認識によって区別すべきものと考えられるようになってきた²⁾。17～18 世紀のハリファクスでのミドルクラス形成を論じたジョン・スメイルが「階級意識は言語と社会経済的要因の相互作用による」³⁾と述べたように、「ミドルクラス」は、単に経済的關係に規定された存在というよりは、日々の様々な経験を通して得られた社会での自らの受容のされ方と、自らのおかれた経済的・社会的環境の相互作用によって醸成された自己認識を紐帯に形成されたものであると言って良いように思われる。

他方、しばしば指摘されるように⁴⁾、18 世紀のイギリスは出版文化が花開いた時代でもあった。1731 年創刊の『ジェントルマンズ・マガジン』の成功を皮切りに、18 世紀を通じて多くの定期刊行物が発行され、それらは主にコーヒーハウスを舞台としてイギリス社会に展開されていった。17 世紀後半から普及し始めたコーヒーハウスは、新聞・雑誌とともに市民の議論の場となり、市民文化を醸成する重要な場として機能していた⁵⁾。

こうした定期刊行物の出版が本格化するのには 1695 年の特許検閲法 (Licensing Act) が廃止されてからであるとされており、その後 1712 年のスタンプ税法 (Stamp Act) が施行されるまでの間に、多くの定期刊行物が刊行された⁶⁾。1712 年のスタンプ税法の施行以降にいくつかは姿を消すものの、1731 年の

1) 労働者階級の形成については、Thompson [1964]。また、特に 18 世紀のイギリス社会において、明確な階級意識ではなくある種の文化的摩擦によって階級が形成されつつあったことを論じたものとして、Thompson [1978]。

2) 「『階級』は多様な『差異』の一つとして断片化され、『階級意識』は『アイデンティティ』として構築主義的な観点から読み直されてゆくこととなった」。長谷川 [2004]、88 頁。また、「中産層が何らかの意味で独自の存在意義をもつとすれば、彼らが彼ら自身の社会的意識を持ち得たかどうかという点にかかっている」。関口、梅津、道重 [1999]、p79。

3) Smail [1994]、pp.117-118。

4) Collins [1973]、小林 (2000) が代表的。

5) コーヒーハウスについては、Collins [1973]、小林 [2000] 他に、Cowan [2005] を参照。また、カーワンの議論を「公共圏」の議論との関連で捉えた中野 [2007]、Ellis (2004) も参照。

6) 17 世紀末から 18 世紀の出版に関する法律とその影響については、Siebert [1952] が詳しい。

『ジェントルマンズ・マガジン』以降は類似の定期刊行物が多く発行され、雑誌や新聞はメディアとして大きく発展していくこととなる。

本稿は、18 世紀イギリスのミドルクラスが一つの社会的集団としての階級意識を持ち始めようとしていた時代において、雑誌がその意識形成に貢献し、それ故に成功していたことを示そうとするものである。用いられる史料は 18 世紀後期に発行された女性向け雑誌『レディス・マガジン』（以下 *LM* と表記）⁷⁾ であり、雑誌経営の成功と意識形成の関係について、定量的な手法を用いて明らかにすることを目標としたい。

2. 『レディス・マガジン』と編集の方針

(1) 雑誌の概要

本稿で用いる *LM* は、1770 年に創刊された女性向け月刊誌であり、主たる読者層は中流からそのやや下層までを含む女性であったとされている⁸⁾。17 世紀の末から 18 世紀末までの彼女らの生活史についてはいくつか蓄積があり、マーガレット・ハントによれば、18 世紀の中流女性は、知的生活においては未だ教育機会などの面で男子よりも不利な立場に置かれ、ほとんど選択の余地無く手芸などの伝統的な教育がなされていたと指摘される一方で⁹⁾、女性向け寄宿学校の普及などを通じて女性にも機会の拡大がもたらされ始めていたことも指摘されている¹⁰⁾。

18 世紀の初頭から、『レディス・マガジン (The Lady's Magazine)』と命名された雑誌は副題の異なるものがいくつか刊行されたが、いずれも短命に終わっている¹¹⁾。その中で 1770 年 8 月にジョン・クート (John Coote)¹²⁾ に

7) 副題を含めた名称は The Lady's Magazine; or Entertaining Companion for the Fair Sex, Appropriated solely to their Use and Amusement である。また、*LM* は現在マイクロフィルム化されたもの (Women advising women, Adam Mathews Publications, 1992) が利用可能であり、本稿でもこれを用いている。

8) Adburgham [1972], p.132.

9) Hunt [1996], p.99.

10) Thompson (2003), pp.134-136.

11) 18 世紀の女性向け雑誌の概要については、Adburgham [1972], pp.81-83.

12) ODNB によれば、クートはサセックス生まれの書籍商であった。1757 年頃から書籍業を始め、いくつかの雑誌を発行している。

よって創刊された *LM* は、1 部 6 ペンスという当時としては安価な価格も影響し、中流の女性を中心とした読者層に受け入れられて大きな成功を取めた¹³⁾。誌面の編集は、当初クートと彼の雇った編集者が中心に行っていたものと思われるが、1771 年にクートはジョージ・ロビンソン (George Robinson) とジョン・ロバーツ (John Roberts) のパートナーシップへ *LM* を売却している¹⁴⁾。1776 年にロバーツが没した後は、*LM* はジョージ・ロビンソンによって出版されることとなり、後年パートナーシップに加わる兄弟のジョン・ロビンソン (John Robinson)、息子で同名のジョージ・ロビンソン (George Robinson) と共に *LM* の出版を続けていくこととなる。世紀が変わるまでは、*LM* は有力な雑誌として発行を続けるものの、1801 年にジョージ・ロビンソンが没し、1804 年には倉庫の火災に見舞われたこともあり、破産へ至る¹⁵⁾。その後も *LM* の出版は続けられるが、相次いで出版される競合誌との競争の中で、1800 年、1811 年に誌面の刷新と値上げを行った末、1832 年に『レディス・ミュージアム』に合併され、62 年にわたって続いた *LM* の名は姿を消すこととなった。

誌面の編集におけるジョージ・ロビンソンの役割については必ずしも明確ではないが、彼は当時の出版界では著名な書籍商であり、出版業界の名士の一人であった¹⁶⁾。しばしば巻頭文には G.R. との署名が付されていることから、誌面編集の方針については彼の影響が感じられる¹⁷⁾。また、18 世紀半ば以降の出版業は大きく発展した時代であり、書籍商は成功が約束された職業の一つ

13) Rogers [1978], pp.50-52.

14) 売却に際して、当初の印刷業者であったジョン・ウェブル (John Wheble) が売却の無効を求めて裁判を起こしている。結果はウェブルの訴えは認められず、『レディス・マガジン』はロビンソンとロバーツによって出版されることとなった。*LM* 1771 年 8 月号に裁判の詳細が記されている。

15) ロビンソンの破産の経緯については、Raven [2007], pp.296-299 を参照。

16) 1801 年 6 月の『ジェントルマンズ・マガジン』に掲載された長文の死亡記事には、以下のよう記述されている。「ペイターノスター通りの自宅で、多くの人に看取られて著名な書籍商のジョージ・ロビンソンが 65 歳で亡くなった。彼は温和で誠実な人物であり、夫として、父親として、友人として惜しむべき人物であったが、より惜しまれるのは公の領域での活動—活字の世界においてであろう。1780 年には、彼は個人としては過去無いほどの規模の小売りを営んでおり、1784 年には彼の兄弟、息子とパートナーシップを結んだ」。The Gentleman's Magazine, vo.71(2), June 1801, pp.578-580.

17) ジョージ・ロビンソンが単独で *LM* の出版を行うようになったのは 1776 年からであるが、そ

と見なされていたが¹⁸⁾、出版物が売れなかった場合には多くの在庫を抱えることになり、書籍業はハイリスクな側面も持っていた¹⁹⁾。事業の成功には売上の上がる内容を見抜き、作り上げる力量が不可欠であり、1804 年の倒産には有能な書籍商であったジョージ・ロビンソンを失ったことも大きく影響していると思われる。LM は少なくとも 18 世紀の間、代表的な女性向け雑誌としての地位を確立するが、それには当時作家に対し気前の良い書籍商として著名であったジョージ・ロビンソンの存在が重要な意味を持っていたことは間違いない²⁰⁾。

LM は、エドワード・コーブランドが「1770-1820 年においては、女性の公式の雑誌であったと言っても過言ではない」と評しているように²¹⁾、創刊後数十年にわたって世論や流行形成の重要な場であり続けた。ジェームズ・レイヴンによれば 1780 年に 14000 部以上の発行部数があり、これは同時代の雑誌の中でもかなり多い数字であった²²⁾。また、流通に関しては、当時の多くの雑誌と同じく、ロビンソン自身のロンドンの店舗以外にも、契約した地方の書籍商を通じて全国的な流通網を持っていた²³⁾。さらに読者への到達という点から見れば、アーサー・コリンズが指摘するように、コーヒーハウスや地方の貸し出し文庫もかなりの影響力をもっていたことも指摘される通りであろう²⁴⁾。

LM は、基本的に小説やエッセイ、時事など多様な内容からなる総合誌で

れ以前から主な編集作業はロビンソンが行っていたものと思われる。1770 年の第 1 巻から第 3 巻までは、投稿先にはクートの雇った印刷業者のジョン・ウェブルの住所が記されているが、1773 年の第 4 巻から、表紙には printed for G. Robinson の文字とともに投稿先にロビンソンの住所が記されている。

18) Collins [1973], p.30.

19) Raven [2007], p.296-299.

20) 18 世紀後半の出版業界は基本的には非常に活況を呈しており、書籍商が著者に対し支払う版権料も高騰した時期である。その中でも、ジョージ・ロビンソンは特に気前の良い書籍商として知られていた。Collins [1973], p.60.

21) Copeland [1995], p.119.

22) Raven [2007], p.246.

23) 第 1 巻から各巻について、表紙には地方での販売を委託した書籍商の名前が記されている。第 1 巻には, sold by Fletcher and Hodson at Cambridge, Etherington at York, Wilson at Dublin, and all other Bookseller in Great Britain and Ireland と記されている。

24) Collins [1973], pp.279-280.

あった。1775 年 1 月号の目次は、表 1 に示されている通りである。巻頭の連載小説 (A Sentimental Journey) と巻末の時事を扱う記事 (Foreign News など)、投稿詩 (Poetry) は 1820 年の改訂までほぼ毎号掲載され、それ以外には「女性への格言 (Maxims and Reflections for the Ladies)」「マトロン (The Matron)」といった連載記事があった。これらの連載記事は数年にわたって連載されたものから数回で終了したものまで様々である。LM に限らず、この時代の雑誌は誌面のほとんどを読者による投稿が占めている。表 1 の内容で言えば、巻頭小説、連載記事、巻末の時事以外はほぼ全てが読者投稿である。これらの投稿は、短い小説がほとんどだが、「編集者へ (To the Editor)」などと題された様々な意見投稿なども多かった。

表 1 1775 年 1 月号の目次

記事タイトル	ページ数
A Sentimental Journey	4
Letters from Amelia Dean	5
To the Editor	1
Racine's Tragedy of Esther	2
Preface to Esther	2
Account of Iphigenia in Aulis	3
The Unfortunate Marriage	4
The Sybil. A Tale	2
The History of Aurella	3
Zamos; Benevolence Rewarded	7
The History of an Humble Friend	2
Advice to the Ladies	3
The Matron	5
Memoirs of Margaret	3
The Retrospective Chronicle	2
Maxims and Reflections for the Ladies	4
The Reasoner	3
Plan to the Tragedy of Matilda	2
Story of the Two Misers	2
Confectionary Receipts	3
Solutions and Questions	4
Poetry	2
Foreign News	3
Home News	2
American News	4

出所) LM, vol.6, 1775.

これら誌面に示される当時の流行は、現在の歴史研究においてもしばしば触れられている。特に女性史や文学史、美術史、出版史などで *LM* は当時の風潮や流行を示す代表的な雑誌として扱われている²⁵⁾ 本稿で用いる *LM* は、1770 年に創刊された女性向け月刊誌であり、主たる読者層は中流からそのやや下層までを含む女性であったとされている²⁶⁾。17 世紀の末から 18 世紀末までの彼女らの生活史についてはいくつか蓄積があり、マーガレット・ハントによれば、18 世紀の中流女性は、知的生活においては未だ教育機会などの面で男子よりも不利な立場に置かれ、ほとんど選択の余地無く手芸などの伝統的な教育がなされていたと指摘される一方で²⁷⁾、女性向け寄宿学校の普及などを通じて女性にも機会の拡大がもたらされ始めていたことも指摘されている²⁸⁾。

だが、それが持つ情報の豊富さにも関わらず、コーブランドによる分析を除いては、*LM* それ自体の内容に取り組んだ業績はほとんど見られない。その理由の一つには、多くの書き手による大量のテキストを科学的に分析する手法が確立されていなかったことが考えられるだろう。その点については後に触れることとし、まず以下では *LM* の編集の方針について検討しておきたい。

(2) 編集の方針

LM は、各巻の巻頭に「Address to the Fair Sex」や「To the Public」と題された挨拶文が付されている。そこにはしばしば編集の方針についての言及が見られるため、本節ではこの挨拶文の内容から *LM* の編集方針について検討したい。1770 年 8 月号から 1771 年 6 月号を収録した第 1 巻に収録された挨拶文は、以下のように書かれている。

「男性向けの月刊誌が大量に印刷されているのに対し、昨今の女性は以前よりもよく読むようにもなったにも関わらず、女性の楽しみや進歩に資す

25) 例えば Adburgham [1972], Shevelow [1989], Mayo [1962], Copeland [1995] が代表的。

26) Adburgham [1972], p.132.

27) Hunt [1996], p.99.

28) Thompson [2003], pp.134-136.

るような雑誌が無いことは驚きである。我々の経済の発展は、女性にも楽しさとともに教訓をもたらすような娯楽を必要とさせている。我々のテーマは、女性の心を向上させることにある。また、外観に気を遣うことはそのような内部の核心に至る最初の入口である。我々はドレスのプレート、刺繍のパターンなどを用意した。ドレスの銅版画は、流行に後れがちな地方の読者にも役に立つことだろう。毎月掲載される興味深い話、小説、銅版画、ロマンスなどは女性の貞節と美德に資するものである」²⁹⁾

ここでは「女性の心の向上、進歩」が目標に掲げられ、「教訓をもたらすような娯楽」を提供することが述べられている。また、1775 年の挨拶文では、以下のように述べられている。

「この 5 年間の好調な雑誌の売上は、我々の努力を刺激し、モラルへの誠実さ、エンターテインメント、女性の進歩といった評判を得させるに至った。だが、それについて考えたとき、それはすべて女性のペンの貢献によるものであると言えよう。これらの女性の書き手の活躍は、女性の可能性について希望を抱かせるものであり、そのような我々のプランを改善するヒントについては、積極的に取り入れていくことを約束するものである」³⁰⁾

1770 年の挨拶文での内容に加え、雑誌へ投稿される女性の書き手について書かれている。このような女性の投稿者についての言及は、18 世紀中の挨拶文において頻繁に見られる。

「雑誌の成功は、部分的には女性によるものであり、女性の進歩と娯楽という我々の当初の計画にもよるものである。我々の雑誌は、11 年間の歴史で評判においても売上においても上昇してきた。他の方法でそのようなことが出来ただろうか？ 編集者は、女性による文章を公に知らしめる

29) *LM*, vol.1, 1770, pp. iii-iv.

30) *LM*, vol.6, 1775, pp. iii-iv.

ためのジェントルな案内人に過ぎない。すべての賞賛は、女性の書き手に向けられねばならない」³¹⁾

「巻を重ねるごとに女性の美德と才能が示されてきた。大量の読者投稿のおかげで我々はベテランの書き手に頼る必要もない。売上の増加はすべて女性の友のおかげである」³²⁾

1801 年のジョージ・ロビンソンの死の前後から *LM* の巻頭文は形骸化し、ほぼ同様の内容が続く。少なくとも 18 世紀中においては、*LM* の編集方針については以下のことが言えよう。すなわち、読者投稿を誌面の中心に据えたことが *LM* を読者の議論の場とすることに成功し、中流女性の読者に支持される大きな要因となった³³⁾。後に示すように、あるべき姿を模索していたミドルクラスの女性にとって、自らの意見表明、議論の場として *LM* を利用できたことが、雑誌の成功に大きく寄与したと言えよう。

3. 「マトロン」の定量分析

(1) 連載記事「マトロン」

本節では、*LM* の連載記事「マトロン」の主題の変化を定量的に分析し、主に中流の女性の間でいかにその意識が形成されつつあったのかを検討する。定量分析の対象としての雑誌は、その内容が小説や時事、詩など多岐にわたるため、雑誌の全体を対象としては意義ある結果を導くことは難しい。これは、小説や時事、詩などからなる雑誌記事をすべて人間の目で読んだ場合でも、そこに統一的な論旨を見いだすことが難しいことと同様であり、記事の内容から何らかの意味を抽出するためには、分析対象を限定することが必要である。*LM* の内容は連載を含めて大部分が読者投稿によって占められているが、その中で

31) *LM*, vol.12, 1781, pp. iii-iv.

32) *LM*, vol.15, 1784, pp. iii-iv.

33) 誌面が女性同士の議論の場として機能し草の根レベルで流行を生み出したことは、コーブランドも触れている。Copeland [1995], p.3.

も「マトロン」は、1774 年 1 月から 1791 年 4 月まで最も長期に渡って連載された *LM* の代表的連載と言えるものである。内容は基本的に読者からの投稿と書き手であるグレイ夫人による対話であり、主題は結婚や家庭生活、子女の教育といったものが多くを占め、読者の様々な悩みに書き手のグレイ夫人がアドバイスを与える形となっている。前節で明らかにされたように、*LM* が「女性の公式の雑誌」であった理由は、それが読者同士の活発な議論と合意形成の場であったからであり、その意味でも、書き手のグレイ夫人を含め多くの読者の間で議論がなされ、中流女性にとっての「あるべき姿」が模索された「マトロン」は、*LM* の多くの記事の中でもその内容を最も良く代表した記事であると言える。以下では、連載期間内で可能な限り長期の変化が検討でき、かつ一年分の読者投稿が安定して得られる 1775 年と 1790 年を対象として取り上げ³⁴⁾、誌面の議論の中で中流女性の意識がどのような変化を遂げたのかを検討したい。

連載の書き手であるグレイ夫人については、1774 年 1 月の初回の掲載時に、自らのペンによって詳しく紹介がなされている。それによれば、本名はマーサ・グレイ (Martha Grey)、ロンドンにほど近いパークシャーに所領を持つ上流家庭の女性である。自らの生い立ちについては、「放蕩とはほど遠い生活」をしてきたが、「人生の様々な局面で多くのことを経験」し、「他の世界を知ることが好きだ」とも述べており、記事が書かれた時点で既に夫に先立たれ、隠居した身であるとしている³⁵⁾。

また、寄せられた投稿の多くについては、投稿者の身分の特定は困難である。分析対象とする 1775 年と 1790 年に関して言えば、投稿者の 40%は男性だが³⁶⁾、投稿の主題の 72%は女性の振る舞いや意識に関するもので³⁷⁾、誌面

34) 「マトロン」は 1774 年の 1 月から掲載されるため、1774 年は 1 年分の記事が得られるが、一回目の連載に読者投稿は掲載されておらず、またその後数回分もページ数があまり多くない。また、1791 年については 4 月までの掲載で、十分な量の投稿が得られない。

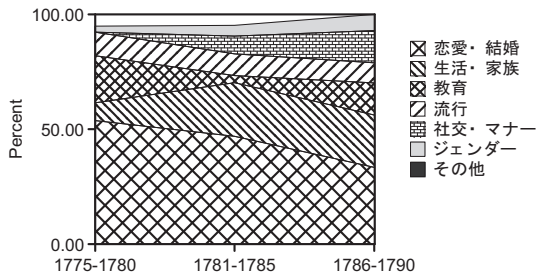
35) *LM*, vol.5, 1774, pp.33-36. 初回の連載時以外にも、しばしば投稿された内容との関連で自らの生活について触れることがある。

36) 1775 年と 1790 年について言えば、掲載された読者からの投書は合計で 25 通であり、そのうち 10 通は男性からのものだった。この割合は「マトロン」の他の年についても大きな変化はない。*LM* の読者層がかなりの広がりを持っていたことが窺われる。

37) 投稿の主題は 72%が女性の振る舞いについてのもので、男性の振る舞いをテーマに取りあげた

では男性からの意見も含めてミドルクラスの女性がどうあるべきなのか模索されていたことが理解できる³⁸⁾。投稿の多くには投稿者の身分や職業について記載はないが、文面からほとんどは中流以上の家庭の投稿者によるものと思われる。ただし、「ロンドンから 200 マイル以上離れた田舎」の「ネズミが出るような家」に住む女性の投稿者³⁹⁾なども存在している。主題については、基本的には貴族階級と平民との結婚や、流行や友人関係において女性がどのように振る舞うべきかが中心をなしている。連載期間中に掲載された 170 あまりの投稿文に見られる主題は、図 1 のように推移している。1775-80 年の期間に約半数を占める「恋愛・結婚」についての投書は、その多くが身分の異なる恋愛についてのものである。このカテゴリの投稿は 1781-85 年以降減少するが、

図 1 主題の推移



出所) *LM*, vol. 6-21.

注) グラフは「マトロン」に投稿された手紙の主題の内訳を示す。1775 年から 1790 年の期間を 5 年ごとの 3 期間に分け、各期間ごとに集計したもの。上記のカテゴリのうち、「教育」は主に娘の教育に関するもの、「ジェンダー」は女性の社会進出を問う投稿を含む。

ものは 8%、どちらかに分類できないものが 20%であった。女性をテーマに取りあげたものは結婚や流行に関するものが多く、男性を取りあげたものは不倫についての 2 通であり、どちらも女性からの投稿である。

38) 1775 年、90 年以外でも、男性からの投稿の多くは妻や娘の行動を中流の女性として問うものがほとんどである。例として 1789 年 1 月の男性からの投稿を挙げておく。「(黒絹のドレスをせがむ妻と娘に対して) 最近、外国の王族が亡くなったときに喪に服することが流行になっている。私は、それは愚かなことだと思う。確かにそれは慣習だが、宮殿の中だけに限られたもので、一般人である我々が、喪服を着てヨーロッパの宮廷人と血縁であるなどと主張すべきではない」。 *LM*, vol.20, 1789, pp.14-15.

39) *LM*, vol.6, 1775, pp.651-652.

代わりに増加する「生活・家族」に分類される投書は、その多くが身分の異なる結婚生活や互いの家族についてのもので、実質的には身分の異なる結婚・恋愛が「マトロン」の掲載期間中を通じて主要な話題であったと言える。

(2) 定量分析

前述のように、*LM* を含む雑誌や日記といった主にテキストによる史料がこれまで十分に活用されてこなかった背景には、その分析手法に限界があったことが考えられる。だが、テキストデータの分析は、近年では以前より導入の敷居も低くなっており、手法も確立され始めている⁴⁰⁾。大量のテキストを目で確認し、その内容を理解しておくことは当然の前提ではあるが、そうした方法のみでは情報の取捨選択や内容の把握について主観を排除しきれない。可能な限り客観的に内容を把握するには、テキストマイニングと呼ばれる定量的な手法が有効である。具体的には、1 年分⁴¹⁾ のテキストに品詞タグを挿入し、品詞ごとの分析を可能にした後、一般語を除いた頻出語を抽出し、その共起関係を特定する。これらをネットワーク図に描くことで、1775 年と 1790 年の両期間における主題の違いを検討する⁴²⁾。このような手法は、語のニュアンスの違いを考慮しないことなどの欠点を持つが、「マトロン」のように多数の筆者によって書かれ、多くの主題について異なる立場からの議論がなされている文章の場合、一人の書き手が決まった主題について書いた文章とは違い、全体の論旨がどのような方向へ変化し、どこに合意があったのかを容易には把握できない。こうした種類の文章を部分的な引用のみに頼って分析することは、個別事例が全体を代表することが保証されておらず、ミスリーディングである。議論全体を対象として分析することが必須であり、その意味でも「マトロン」の分析に定量的な手法を適用することは必要であろう。また、定量分析の結果を

40) 本稿で用いたテキストマイニングの手法については、鈴木・金 [2009] を参考にした。

41) *LM* は、12 ヶ月分を纏めて 1 巻として出版する際に、supplement として 1 ヶ月分の内容を付加して出版した。そのため、分析に用いられているテキストは実質的に各年 13 ヶ月分となる。

42) 品詞タグの挿入にはエリック・ブリルによる Brill Tagger を、ネットワーク図の描画には統計ソフト R を用いた。「共起」とは、特定の語と語が一文中に出現することを指す。共起の頻度が高い語のペアは関係の強い語であると言える。詳しくは鈴木・金 [2009] 参照。

時系列で比較するには、比較対象の文章の形式が同じで、かつ同様の主題について書かれていることが必要だが、最も長期にわたって続いた連載である「マトロン」は、その点でも最も条件を満たす記事であると言える。

1775 年、1790 年の各年において、語の頻度は表 2、語の共起関係は表 3 にまとめられている通りである⁴³⁾。頻度上位の語からは、両期間とも「男性 (man)」, 「女性 (woman)」, 「淑女 (lady)」など男性と女性についての語が多く現れ、女性誌としての特徴を示している。またそれ以外の語では「マナー (manner)」という語が両期間で頻出しており、読者の多数を占める中流の女性がどのように振る舞うべきかが、両期間を通じて主題の大きな部分を占めていたと思われる。共起語についても同様の傾向が窺えるが、主要なテーマについて若干の違いが見られる。1775 年では男性と女性を中心に、女性とマナーの関係

表 2 頻出語 (1775, 1790 年)

1775年		1790年	
語	頻度	語	頻度
1 woman	98	man	68
2 man	97	people	68
3 lady	82	woman	59
4 people	49	lady	55
5 manner	45	manner	54
6 family	37	time	54
7 wife	36	madam	53
8 life	33	friend	51
9 regard	33	father	46
10 husband	32	life	43
11 person	32	female	39
12 mother	30	family	37
13 sex	30	child	36
14 way	30	daughter	36
15 character	29	girl	35
16 fortune	29	age	32
17 behavior	27	letter	32
18 servant	27	person	32
19 friend	26	advise	30
20 house	25	opinion	30

出所) *LM*, vol.6, 1775. および *LM*, vol.21, 1790.

43) 表 2, 3 とも、表中の語は固有名詞を除いた名詞のみを用いた。

も主要なテーマとなっているのに対し、1790 年では「母親 (mother)」と「子供 (child)」, 「父親 (father)」と「娘 (daughter)」など、より家庭に関する語が多くなっている。

こうした関係は、グラフ化することでより明確に把握することができる。図 2 は 1775 年について、図 3 は 1790 年について、語の頻度と共起関係を可視化したものである⁴⁴⁾。1775 年のグラフからは、主題が男性と女性の関係を巡って展開されていることが分かり、これに次ぐ主題はマナーについてとなっている。manner という語に繋がる woman, lady という語は、いずれも矢印の始点であることから、このマナーは主に女性のマナーを指すものであろう。ま

表 3 共起頻度 (1775 年, 1790 年)

1775年			1790年		
語1	語2	共起頻度	語1	語2	共起頻度
1 woman	man	42	woman	man	26
2 lady	woman	34	mother	father	19
3 lady	man	31	woman	life	18
4 lady	manner	20	mother	child	15
5 husband	woman	19	father	daughter	14
6 man	man	19	people	life	14
7 time	lady	19	sex	woman	14
8 book	mind	17	woman	age	14
9 man	fortune	17	father	family	13
10 woman	manner	17	man	life	13
11 woman	mind	17	man	age	12
12 husband	wife	16	people	woman	12
13 lady	book	16	life	age	11
14 lady	friend	16	time	age	11
15 lady	mind	16			
16 woman	woman	15			
17 lady	sex	14			
18 woman	life	14			
19 husband	man	13			
20 man	sex	13			
21 people	woman	13			

出所) *LM*, vol.6, 1775. および *LM*, vol.15, 1790.

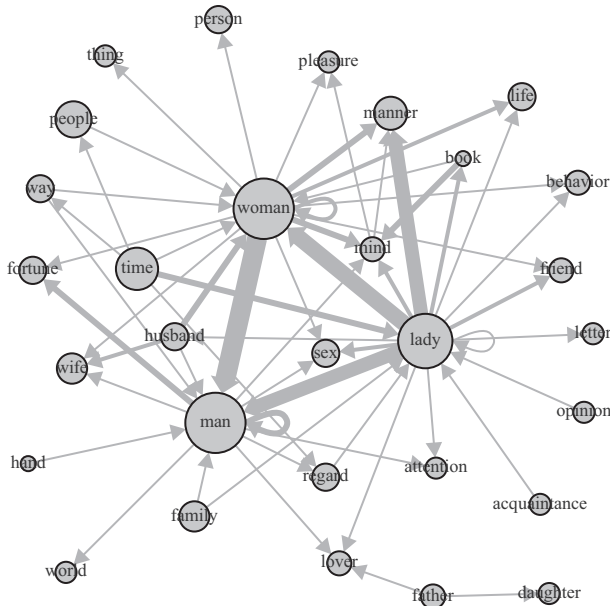
注) 共起頻度とは、表の語のペアがともに一文中に出現した回数を示す。1775 年は共起頻度 13 回以上、1790 年は 11 回以上の語を示した。

44) 図 2, 3 とも、固有名詞を除いた名詞のみを用いている。

たこの語には、「振る舞い (behavior)」や「行い (conduct)」など、同義と見なせる語があり、それらを含めると、女性とその振る舞い方については男性と女性についてと同様に 1775 年の「マトロン」の主要なテーマであったと言える。マナーに関するもの以外で、女性と関係する語は「友人 (friend)」, 「性格 (person)」, 「気持ち (mind)」などであるのに対し、男性と関係する語では「資産 (fortune)」⁴⁵⁾ が最も強い共起関係を示している。

1790 年のグラフでは、1775 年ほどの明確な主題は読み取れない。1790 年の

図 2 1775 年の共起グラフ



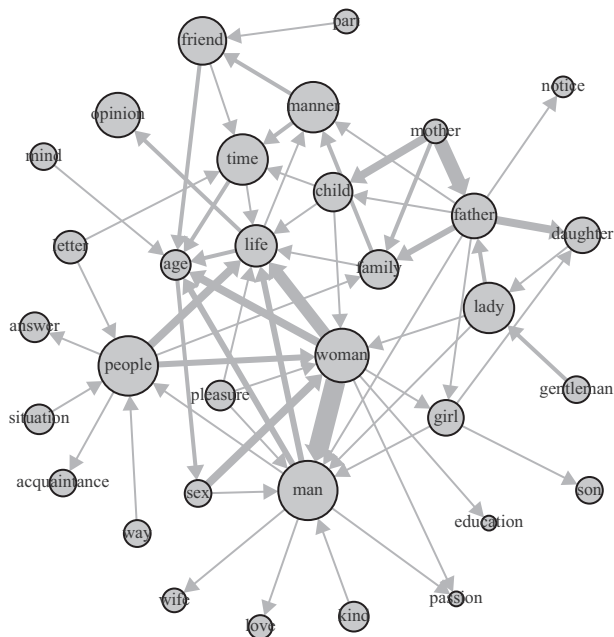
出所) *LM*, vol.6, 1775.

注) 円の大きさは語が文中に出現した頻度を、矢印の太さは共起頻度を示す。矢印の始点は文中で先に出現したことを示し、矢印の終点は文中で後に出てきたことを示す。円が大きいほど「マトロン」で取り上げられる回数が多いことを示し、矢印が太いほど関係の強い語のペアであると言える。共起頻度 8 回以上のものを用いた。

45) 誌面での *fortune* という語は、資産の水準を指すと同時に身分や出自といった意味合いも強く、しばしば誌面でも重要な意味を込めて使われている。

語の頻度、共起関係は 75 年のそれよりも低い水準にあるが、これは図 1 で示されたように雑誌の主題がより多様化していることを反映している。共起関係からは、やはり男性と女性が主題の中心であることが窺えるが、一方で「人々 (people)」という語も頻度を増しており、雑誌の主題が男性、女性にとらわれなくなってきたことも看取できる。一方で女性に関する語では、男性の他では「人生 (life)」という単語が最も強い共起関係にあり、女性自身の人生についての言及が増えていることが推測できる。1775 年の段階で主要なトピックであったマナーについては、依然として出現頻度は高いものの、女性とはあ

図 3 1790 年の共起グラフ



出所) *LM*, vol.21, 1790.

注) 円の大きさは語が文中に出現した頻度を、矢印の太さは共起頻度を示す。矢印の始点は文中で先に出現したことを示し、矢印の終点は文中で後に出現したことを示す。円が大きいほど「マトロン」で取り上げられる回数が多いことを示し、矢印が太いほど関係の強い語のペアであると言える。共起頻度 10 回以上のものを用いた。

まり結びついておらず、他方の男性については、1775 年の段階で強い共起関係にあった資産という語に代わり、「愛 (love)」や「情熱 (passion)」といった語と共起している。このことは、当時のロマンティシズムの影響が強く感じられるものではあるが⁴⁶⁾、主に女性の視点から見た *LM* の記事にあって、男性との関係に変化が生じていることを示唆しているように思われる。また、男性と女性を基軸とした話題以外では、「父親」、「母親」、「子供」、「家族 (family)」といった語の比重が増しており、これらの語の間で強い共起関係が見られる。

以上のような結果からは、以下のような含意が得られよう。すなわち、1775 年、1790 年を通して「マトロン」の主題は男性と女性の関係を核に展開しており、次いで様々な状況にあって女性や人々がどう振る舞うべきかが主要なテーマとなっていた。男性と女性の関係については、1775 年の段階で男性はその身分、資産との関連で考えられており、このことは、ミドルクラスの女性にとって、社会的上昇が貴族階級の男性との結婚でしか果たせなかった現実と深い関係があるように思われる。経済的成功を収めたミドルクラスにとって、さらなる向上、社会的上昇とは、貴族になることであったと言える。

1790 年の段階で、男性と女性の関係は変化を見せる。男性はその資産との関係ではなく、愛情の対象として捉えられ始めている⁴⁷⁾。これは中流の一般的な物質的富裕度の上昇と共に、結婚を中流の社会的上昇の手段ではなく、愛情を紐帯とした関係であると見なす考え方へと変化してきたことを意味していると思われる。この変化は、家族史研究で知られるローレンス・ストーンの主張する変化と一致するものでもある⁴⁸⁾。上流との結婚を是とする伝統的な価値観は、結婚の本質を重んじる価値観へと変化し、その中で中流の女性自身の人生が家庭や友人との関係の中でいかにあるべきかが模索されていた。階級と

46) 一般に、イギリスでのロマンティシズムの発展は 18 世紀末からと言われており、文学史の分野では広く認知されることである。Roe [2005], pp.1-6 など。

47) Copeland も、ヒロイン像とファッションに関して 1770 年代と 1780 年代で大きな違いが見られたことを指摘している。Copeland [1995], pp.129-132.

48) Stone [1977], pp.390-404. ストーンによれば、18 世紀以降の中流以上の家庭では、結婚相手の選択について、両親よりも当事者同士の決定がより意味を持つようになり、さらにその基準は社会的地位や資産の水準よりも、愛情や同伴者としての意識 (companionship) へと変化したとされる。

しての意識は、それを構成する個々人の身近な主題の中で「どうあるべきか」という問いかけを通して模索され、見出されていたと思われる。

(3) 投稿記事と意識形成

定量的な把握による以上のような内容は、以下に挙げる 1775 年と 1790 年の投稿を比較することでよく理解できるだろう。1775 年 2 月の「ビジネスで幸運に恵まれ、名誉とともに大きな資産を築くことができた」父を持つ女性からの投稿には、以下のように記されている。

「彼はとても感じの良い人で、特権的な身分と十分な資産を持っている人です。私の父は彼には何の異論もありません。それどころか、私が彼の気を引いて喜んでいるように見えると、父は彼を激励するのです。それは、私に「彼を好きになることは間違いではない」と思わせてくれました。

(中略)

ある日、私が恋人と話していたとき、彼は少しの間席を離れて父と話し、意気消沈した様子で戻ってきました。私はすぐに何かとても受け入れがたい事実を予感し、彼は私にこう言いました。「結婚の申し込みをするに当たって、あなたの父親は、私を息子とするには何の異存もないが、結婚する娘に対しては、結婚式にふさわしい装いができる以上のものを与えるつもりはない、と仰ったのです」。さらに、私の偽りの恋人はこう続けました。「あなたの父親は十分な財産をお持ちだが、それをあなたと結婚する私に分け与えないことは間違いだと思う」。彼は自らの不幸を嘆き、去っていきました。

父は私の部屋へ来て、私の目に涙が溢れているのに気づきました。父は「彼は十分な資産があるのに、さらなる資産を求めて結婚を望んでいる。そんな相手に、お前を与えるわけにはいかない」と言いましたが、彼に財産を分け与えないということで、私の人生において望ましい目標だと思っていたことを奪ってしまった父に対し、私は強い怒りを感じていたことを

告白せねばなりません。彼はそれにふさわしい人でした」⁴⁹⁾

また 1790 年については、エルヴィラと名乗る「ロンドンを離れて暮らすペンで生計を立てている若い女性」からの、以下のような投稿の例を挙げておく。

「私はここで、ある男性に出会いました。ルシアスは私に、雄弁でセンスの良い、情熱に満ちた手紙をくれました。ルシアスの資産はあまり大きいものではなく、そのことが裕福さの面で、また愛と幸せに満ちた生活を維持できるのかという面において、私に彼の真剣な申し出に答えることを難しくしています。(中略)

そこで、あなたにこの 4 つの質問に答えていただきたいのです。

1. あなたは、その資産以外にすべての条件を満たすルシアスを受け入れるべきだと思いますか？
2. 彼に資産がないという理由で、共に愛し合っているにも関わらず冷酷に彼を拒絶することは正しい行いなのでしょうか？
3. グレイ婦人も、ルシアスを拒絶することがより正しい行為だと思われますか？ また、不幸せな裕福だとしても、別の男性を探すことが賢明だと思われますか？
4. 私の資産も大きいものではなく友人も多くはありません。私は結婚した方がよいのか、それとも、彼と私の条件が良くなるまで待った方がよいのでしょうか？」⁵⁰⁾

75 年の投稿では、投稿者は望ましいと感じていた結婚を父によって妨害された形だが、文面は投稿者の女性がどのような結婚を理想だと考えていたのかを如実に示している。90 年のエルヴィラの投稿では、相手の男性の人格、自らに対する情熱について多様な表現で多くの記述があり⁵¹⁾、エルヴィラは相手の

49) *LM*, vol.6, 1775, pp.66-68.

50) *LM*, vol.21, July 1790, pp.356-358.

51) 本文に引用した以外でのルシアスに対する記述では、「その愛情は本物 (true) で揺るぎなく (constant)」, 「熱烈で (ardent)」, 「優しく (kind)」, 「思慮のある (sensible)」など、1775 年の投稿にはほとんど見られない人格そのものに対する多様な記述がある。

男性の人格、情熱を結婚の基礎であると捉えている。他方、75 年の投稿者は、相手の人格についての記述の代わりに「特権的な身分と十分な資産」を持っていることが触れられ、そうした男性との結婚を「人生における望ましい目標 (desirable establishment in life)」と書いている。75 年の投稿文において「資産 (fortune)」という語は頻繁に登場し、「愛 (love)」や「情熱 (passion)」といった語や相手の人格についての記述はほとんど登場しない。結婚が第一に資産との関係で捉えられていたことが看取できよう。1775 年でも 1790 年の段階でも、基本的に結婚は愛情に基づくものと捉えられていたが、その愛情が何に由来し、何を理想と考えていたかには大きな違いが見られると言える。

1775 年から 1790 年において、こうした価値観の変化は *LM* の他の記事にも頻繁に見られ、90 年のエルヴィラの投稿はこうした変化をよく表したものの一つである。文中の 4 つの質問は、そのほとんどが結婚において資産と愛情のどちらを優先すべきか問うものである。これら質問に対し、グレイ夫人は「豊かで惨めであるよりも、貧しくても満たされている方が疑いなく良いこと」であり、「エルヴィラがまだ待てるほど十分に若いならば、ルシアスが十分な資産を築くまで待つべき」とアドバイスしている⁵²⁾。

また 1790 年 1 月には、身分の異なる結婚を経験した女性から以下のような投書が寄せられている。

「私は中年の女性で、20 年前ほど前に私より優れた資産を持つ尊敬すべき男性と結婚しました。幸せを約束されたと思われるでしょうが、実際には全くそんなことはなかったのです。(中略)

私は夫とはほとんど喧嘩はしませんが、彼はいつも横柄な態度で「そういうものなのだ」とか、私のほほに手を当てて「やがて分かるだろう」と言うのです。彼は確かに私には優しく、私はこれまでたくさんのプレゼントをもらいました。また彼は、私の親類を家に招いてくれたりしましたが、それはどうも彼にはうんざりするもののようで、客人達にも良いものでは

52) *LM*, vol.21, August 1790, p.422.

なかったようです。客人たちは朝食にも夕食にも現れず、結局の所、彼らはそれは自分のやり方に合わず、間違っていると感じていたのです。

私はどうすべきなのでしょう。豊かさの中に一人閉じ込められて生きるべきなのでしょうか、それとも私の友人達に傷つけられ、侮辱されて生きるべきなのでしょうか。グレイ夫人、どうか私の奇妙な状況-、いえ、こうした状況はたくさんあると思います-について、ご意見を下さい」⁵³⁾

18 世紀末の *LM* には、このような「マトロン」の投稿だけではなく、小説やエッセイの形でも、かつて理想だと思われていた結婚に対する疑問が多く寄せられる。結婚という主題は女性誌としての特徴ではあるが、それは彼我の家柄、出身階級が改めて問い直される場でもあった。1775 年の段階で「望ましい人生の目標」であった上流との結婚は、実は幸福を約束するものではないことが明らかになるにつれ、ミドルクラスの女性は新たに目指すべき理想を模索し始める。その結果は、エルヴィラへのグレイ婦人の返答が示すように、かつて理想であった「貴族になること」から、「ミドルクラスとしての幸福」を追求する姿勢への変化であったと言えるだろう。そこには、ミドルクラスと貴族は異なるのだという認識と、自らはミドルクラスであるという自意識が読み取れる。

18 世紀末の *LM* に見られたこのような変化は、別の形でコーブランドも指摘している。コーブランドは、読者投稿で寄せられる多くのフィクションの内容について、70 年代には憧憬とともに描かれた上流の生活、貴族男性との結婚の物語が頻出するのに対し、80 年代以降には上流男性からの求婚を断り、情熱的な中流の男性との結婚を描くものが多く現れることから、中流女性の目指す理想が変化したことを指摘している (Copeland, 1995, pp.129-132)。 *LM* の「マトロン」以外の記事にもこうした傾向は強く見られるが、中流が上流になることをやめ、中流であることを選択する過程では、必然的に自ら「中流」であることを受容することが必要であり、ここにミドルクラスとしての階級意識の

53) *LM*, vol.21, January 1790, pp.30-32.

形成が確認できる。

4. おわりに

産業革命が進行する 18 世紀末のイギリスにおいて、ミドルクラスを形成しつつあった人々が、大きな変化の中にあったことは間違いない。その中で、特に女性にとっては、結婚を通じて人生において何をを目指すのかという問題は最も大きなテーマであった。雑誌テキストの分析結果は、中流女性たちが上流を目指すことをやめ、ミドルクラスとしての意識形成を始めたことを示唆している。ジョージ・ロビンソンによる *LM* の編集方針はこの動きをうまく捉えており、読者投稿をうまく活用し誌面を読者の議論の場として機能させたことが *LM* を「女性の公式の雑誌」⁵⁴⁾ として成功させた大きな要因であろう。競争が激化しつつあった 18 世紀後半の雑誌経営において、最も重要な点は社会の変化を読み取り、そこに貢献するものを作り上げる手腕であった。

また、本稿は研究の手法という点でも新たな試みを提案するものでもある。テキストを始めとした質的データの分析は近年大きな発展を遂げた分野であり、大きな活用の余地が残されているが、その利用には、テキストの持つ意味についても注意を払う必要があるだろう。本稿で用いた読者投稿の多くは、文中で自ら中流であると称し、誌面で書き手同士の議論を通じて、書き手の主体的な自意識と誌面に表れた言語の相互作用のうちに階級意識を形成していたように感じられる。いずれにせよ、階級をどのような方法でいかに捕捉するかという議論には、さらなる深化が必要であろう。

参考文献

- 小林章夫 [2000] 『コーヒー・ハウスー 18 世紀ロンドン、都市の生活史』講談社
鈴木努、金明哲 [2009] 『ネットワーク分析』共立出版
中野忠 [2007] 「王政復古期以降のロンドンにおける市民的社交圏」『早稲田社会科学総合研究』第 7 巻 3 号

54) Copeland [1995], p.119.

- 長谷川貴彦 [2004] 「修正主義と構築主義の間でーイギリス社会史研究の現在ー」『社会経済史学』第 70 巻 2 号
- Aldburgham, Alice [1972], *Woman in Print: Writing Women and Women's Magazines from the Restoration to the Accession of Victoria* (London: Allen and Unwin)
- Collins, Arthur Simons [1973], *Authorship in the Days of Johnson: being a study of the relation between author, publisher, and public, 1726-1780*, (Clifton: A. M. Kelly). (青木健, 榎本洋訳『18 世紀イギリス出版文化史 作家・パトロン・書籍商・読者』彩流社, 1994 年)
- Copeland, Edward [1995], *Women Writing about Money: Women's Fiction in England, 1790-1820* (Cambridge: Cambridge University Press)
- Cowan, Brian [2005], *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse* (London & New Heaven: Yale University Press)
- Ellis, Markman [2004], *The Coffee House: a Cultural History* (London: Weidenfeld & Nicolson)
- Hunt, Margaret [1996], *The Middling Sort : commerce, gender, and the family in England, 1680-1780* (Berkeley: University of California Press)
- Mayo, Robert [1962], *The English Novel in the Magazines 1740-1815* (London: Oxford University Press)
- Raven, James [2007], *The Business of Books: booksellers and the English book trade, 1450-1850* (New Haven: Yale University Press)
- Rogers, Pat (ed.) [1978], *The Context of English Literature, the Eighteenth Century* (London: Methuen)
- Roe, Nicholas (ed.) [2005], *Romanticism: An Oxford Guide* (Oxford & New York: Oxford University Press)
- Shevelov, Kathryn [1989], *Women and Print Culture: The Construction of Femininity in the Early Periodical* (London & New York: Routledge)
- Siebert, F. Seaton [1952], *Freedom of the Press in England 1476-1776* (Urbana: University of Illinois Press)
- Smail, John [1994], *The Origins of Middle-Class Culture Halifax, Yorkshire, 1660-1780* (Ithaca & London: Cornell University Press)
- Stone, Lawrence [1977], *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (London: Weidenfeld & Nicolson)
- Thompson, E.P. [1964], *The Making of the English Working Class*, (New York: Pantheon Books) (市橋秀夫, 芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003 年)

Thompson, E.P. [1978], “Eighteenth-century English society: Class struggle without class?”, *Social History* vol.3(2), pp.133-165.

Thompson, Francis, M.L. (ed) [2003], *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950 vol.3 : social agencies and institutions* (Cambridge & New York: Cambridge University Press)